

## 南部の町で謎を解く

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越川, 芳明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22359">http://hdl.handle.net/10291/22359</a>

## 南部の町で謎を解く

越 川 芳 明

いまから、10年以上前にアメリカ南部の港町チャールストンを訪れたことがある。

滞在中に、私には体験してみたいことが三つあった。ガラ料理を食べること、ゴスペルソングを聞くこと、サリヴァン島に行くことである。

すべてかつてアフリカからこの地に連れてこられた「ディアスポラの民」といべき黒人奴隷の遺産とかかわっている。

ガラ料理というのは、サウス・キャロライナ州の沖合の島々（シーアイランドズ）に住んでガラ語をしゃべっている人たちの料理のことだ。実際にしゃべられているガラ語を聞くのが私の旅の最大の目的だったが、そのことはすでに別のところで触れた。20世紀アメリカ音楽を代表する作曲家ガーシュインが、チャールストンを舞台にガラ語のオペラ『ボギーとベス』を作ったことである。

よく言語が比喩で「舌」と呼ばれるように、舌で味わう料理も、それを食べている人間を知るうえで大きな手掛かりになる。

その頃はまだスマホがなかったので、イエローブック（電話帳）で、街で唯一のガラ料理店を見つけて、レンタカーを飛ばしていった。私の選んだのは、ザリガニ料理だった。これは家庭料理として食べるべきもので、わざわざレストランで高い金を出して食べる代物ではない。そういう印象を私はもった。

ゴスペルソングについては、地元で発行されている地方紙で調べて各地の教会を訪ねたり、コンクールが開かれている会場に向いたりした。プロの歌手ではないのに、天童よしみや島津亜矢みたいに恐ろしく声量のある歌手が多くて、びっくりした。先祖の霊を呼び出す歌だから、当然かもしれないが、魂のこもったソウルフルな歌いっぷりに感激した。

スピリチュアル  
黒人霊歌や、それから派生してできたゴスペルソングは、逃亡奴隷との関

連で興味がひかれたのである。刺激的な記事や論文がいくつも書かれていて、逃亡奴隷のための秘密の暗号がゴスペルソングの歌詞に隠されているという。一見、旧約聖書のエピソードをもとにしたり、あるいはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネらによる福音書の言葉を引用していたりしている黒人教会の音楽の中に、一体どんな暗号が隠されているのか。

例えば、霊歌の中に「水の中を歩け、水の中を歩け、子供たち」とあるのは、「川水の中を歩きなさい」というアドバイスだという。奴隷狩りの獰猛な猟犬に追いかけられたら、こちらの匂いを悟られないために川水の中を歩くことを勧めているのである。また「ヨルダン川」という言葉は、この世とあの世の境界を意味するが、奴隷が歌うとヨルダン川はオハヨー川の比喩となり、それを渡って「天国」である北の自由州やカナダに脱出できる希望の象徴となる。「死んだ樹はあなたに道を知らせる」という歌詞は、たとえ北極星が見えなくても、死んだ樹の北側に苔がむしっているので、そちらの方角（北部）へ行けば良いという知恵が語られているらしい<sup>(1)</sup>。

さらに、チャールズ・ピッカード・ウェアという奴隷廃止論者（1840-1920）が、サウス・キャロライナのガラの人たち（プランテーションの奴隷）の歌を収集して、歌詞と音符を譜面に残しているのはとても貴重な文献である<sup>(2)</sup>。

最後のサリヴァン島は、三つの観点から興味があつた。

一つはトニ・モリスンのチャールストン訪問に関する新聞記事にもあるように<sup>(3)</sup>、アフリカから連れられてきた奴隷たちが初めて陸揚げされた場所であること。

もう一つは、19世紀アメリカ作家のエドガー・アラン・ポーがここにある米軍のモートリー砦に兵士として駐軍していたこと。

さらに、三つ目はその作家がこの島を舞台にした有名な短編を書いていることである。

その作品とは「黄金虫」（1843年）である。主人公はウィリアム・ルグラン。語り手の「わたし」によれば、ニューオーリンズの裕福なユグノー（フランスのプロテスタント）一族だったが、家は没落して、はるばるこの島までやってきたらしい。昆虫収集が趣味で、教養のある隠遁者といった風情だ。

一人暮らしのこの教養人に仕える黒人がいる。ジュピターという名前で、ルグラン家が没落する前からのルグラン家の奴隷だったが、今は自由の身だ。それでも、相変わらず召使いとして主人に仕えている。

高尚な知識に恵まれた白人と無学な黒人のコンビだが、生きていく知恵者としては、上下関係が逆転しているところを作家はコミカルに描く。

この物語は、昔、カリブ海を荒らしまくったイギリスの海賊が埋めたとされる財宝の伝説に基づき、ルグランが高度な知性を持つ探偵よろしく、羊皮紙に書かれた暗号を解き明かす「宝探し」のミステリーである。

ルグランは、ある日、羊皮紙と珍しい黄金虫を見つけて、急に心身に変調をきたす（少なくとも召使いにはそう見える）。心配した召使いがわざわざ「わたし」に相談にしに来てこう言うのである。

“... Ise gittin to be skeered, I tell you. Hab for to keep mighty tight eye ‘pon him ’noovers. Todder day he gib me slip ‘fore de sun up and was gone de whole ob de blessed day. I had a big stick ready cut for to gib him deuce good beating when he did come — but Ise sich a fool dat I hadn’t de heart arter all — he look so berry poorly.”<sup>(4)</sup>

「おれ、おっかなくなつて。ご主人様から目が離せないだよ。きょうも、陽がのぼる前におれをまいて、まるまる一日中どこかへ消えていきなされた。それで、おれ、でかい枝を切っておいて、ご主人様が帰ってきたら、それでお仕置きをしてやろうとおもっていたけどさ。でも、おれはまったくの愚か者で、けっきょくそんなことをする度胸もなくて。見たところ、ご主人様は本当に参っていなさる」

いま注目すべきは、召使いジュピターのおしゃべりの内容ではなく、しゃべり方のほうである。ポーはまるでそばで聞いているかのように、見事に書き写している。もちろん、これはポーの創作によるものだが、これはただのブロークンの英語でなく、ガラ語（少なくともピジン英語）である。

ガーシュインの作曲した『ポーギーとベス』のポーギーのしゃべる言葉と同じである。ポーがチャールストンの黒人たちのガラ語を聞いたことがあるのは間違いないとしても、ガラ語をしゃべる黒人を登場させた意味はどこにあるのだろうか。

なぜジュピターはこの作品でガラ語をしゃべるのか？

これはこの短編のテーマである財宝探しや暗号解読とは次元の違う、読者

に与えられたもう一つのミステリーである。

大方の読者は、ジュピターの教養のなさを（主人のルグランの理知的な頭脳と対照させて）しめすためにポーがそうした規格はずれの英語をしゃべらせていると考えるかもしれない。

だが、そんなレベルの低い話ではないはずだ。ジュピターは能力がないからガラ語（ピジン英語）をしゃべるわけではない。むしろ、語り手の「わたし」に単独で相談に来るなど、相当コミュニケーション能力にたけた男なのだ。

世界中で使われている英語に詳しいメルヴィン・ブラッグズもいっているように、そもそもガラ語（ピジン英語）は、いわゆる「正統な」英語に対しても大きな影響を及ぼす可能性のある、すぐれた英語の分派なのだ。

ピジンは、独特な土着の風土によって培われる方言とちがって、人工的な言葉だ。ブラッグはピジンを「生きる必要から生じた便利な速記のような言葉」<sup>(5)</sup>と表現している。

召使いのジュピターは、主人と一緒にニューオーリンズから当地にやってきた、と語り手の「わたし」は知っている。

ニューオーリンズはもともとフランス領であり、カリブ海の島々（ハイチやマルティニーク）に通じていた。カリブ海のフランス語圏の逃亡奴隷の特徴として、都市に暮らす逃亡奴隷がいた。かれらはプランテーションの奴隷と違い、技術を身につけており、職人をしたり、こまごまとした家事をこなすことができた。また、港の近くに住み、働く者の出自を問わないボスの元で、ひそかに日雇い労働者として暮らすこともできた<sup>(6)</sup>。

ジュピターは、もともと奴隷とはいえ、プランテーションで肉体労働を強いられたのではなく、家つきの召使いだった。

ニューオーリンズにいた頃は、古いユグノーの家柄であるというので、主人もジュピターもおそらくフレンチ・クレオールを話していたのではないだろうか。いま、ルグランのしゃべる英語を見てみると、語り手の「わたし」とまったく変わらない訛りのない英語である。なぜルグランはフレンチ・クレオールをしゃべらないのか？

もし作中にフレンチ・クレオールが出てくるのが読者にとってハードルが高すぎるとすれば、なぜポーは少なくともルグランにフランス語訛りの英語をしゃべらせなかったのか。

とはいえ、ルグランがフランス語訛りの英語をしゃべるところが一箇所だ

けある。黄金虫の触覚を、フランス語風に「アンティンノー」anntinnoeと発音するのだ。それを「錫」(tin)と勘違いしたジュピターとチグハゲな会話になる。しかし、ジュピターの勘違いがルグランに覚醒をもたらすというオチがついてくるので、ここのフランス語訛りも、ポーの周到な計算に基づくものかもしれない<sup>7)</sup>。

ここで少し脱線するが、ボードレールがポーの作品をフランス語に翻訳していることを思い出し、ボードレールは果たしてジュピターのガラ語をどのようなフランス語に翻訳しているのか、興味がひかれた。

ボードレールがジュピターのガラ語をフレンチ・クレオールで翻訳していたらどうだろう？ ひそかに私の心は踊った。

実は、すでにボードレールのフランス語訳とポーの原作(英語)を読み比べて論文を書いた学者がいる。その論文によれば、残念ながら、ボードレールはジュピターのおしゃべりにて手こずりながらも、破格のフランス語で訳したわけではなかったらしい。ジュピターの発音する音を頼りに、意味の通るフランス語にしたようだ<sup>8)</sup>。

それならば、パトリック・シャモワゾーみたいな、カリブ海のマルティニーク出身の現代作家に、ジュピターの英語をフレンチ・クレオールで訳してもらったら面白いものになるかもしれない。私は妄想に耽った。

脱線はそのくらいにして、本論に戻ろう。ルグランは羊皮紙に書かれた数字と記号からなる暗号文の解説に際して、ポーの言語観を代弁するかのようになり、「暗号解説というのは、それを試みる人間が知っているだけの言語を実験してみるしか、正解へいたる道はない」<sup>9)</sup>と述べる。

いま、「暗号解説」というところを「創作」に、「正解」というところを「完成」に置き換えてみよう。

「創作というのは、それを試みる人間が知っているだけの言語を実験してみるしか、完成へいたる道はない」ということになる。

ポーにとって、創作は、単に物語を語るだけのものではなかった。自分の知っている言語を極限まで実験してみることに肝要だった。

おそらくルグランにフランス語訛りの英語をしゃべらせるのは、ポーの手には余る言語実験だった。それに対して、ジュピターにガラ語をしゃべらせることは、ポーの言語実験への挑戦心を刺激することだった。

そういう意味で、ジュピターがしゃべるガラ語は、ここではフレンチ・クレオールの代用とみなすことができる。それこそ、ポーが試みることででき

た最大の言語実験だったからである。

ルグランは、「解読の原理というのは、とりわけ単純明快な暗号に関する限り、特定の慣用表現がどんな特徴を持っているかで決まる」<sup>(10)</sup>ともいっている。

ポーにとって、「特定の慣用表現」さえつかんでおけば、ジュピターにガラ語をしゃべらせることぐらい朝飯前のことだったのかもしれない。

さて、ガラ語は仲間内の言語である。自分たちを差別し迫害する白人の前では絶対に口にしない秘密の言語だった。

ブリタニカ大辞典によれば、「ガラ語は、家族やコミュニティ内部では自然に話されているが、この言葉を汚らわしいと思っている部外者には隠された一種の〈地下言語〉と見なすことができる」<sup>(11)</sup>という。

なぜジュピターはそうした仲間内だけの〈地下言語〉を白人の「わたし」にしゃべるのか。

ジュピターとそのガラ語が登場するのは、物語の前半だけである。物語の後半は、財宝発見後に、ルグランが「わたし」におこなう暗号解読の説明に終始する。ルグランの理知による説明に乱れがなく、一直線に物語を大団円へと導く。

それに対して、物語の前半は、ジュピターの視点もガラ語もあり、「わたし」と読者にとって、あちこちに謎が拡散し、サスペンスが高まる。だから、物語として面白いのはこちらのほうである。

ポーは、ガラ語の言語実験をルグランの財宝探しの物語に読者を巻き込むために使ったのだ。自分たちの世界だけに流通するそうした「地下言語」によって、作者と読者だけの親密なサークルに引きずり込むために。

#### 《註》

- (1) Peter Crimmins, "Underground Railroad Expert Decodes Songs that Held Practical Advice for Fleeing Slaves," *WHYY*, Oct. 15, 2014. <https://whyy.org/articles/underground-railroad-expert-decodes-songs-with-practical-advice-for-fleeing-slaves/> 08/21/2021. "Underground Railroad Secret Code," *Harriet Tubman Historical Society*. <http://www.harriet-tubman.org/underground-railroad-secret-codes/> 08/21/2021.
- (2) Charles Pickard Ware, *Slave Songs of the United States* (New York: A. Simpson & Co., 1867). <https://docsouth.unc.edu/church/allen/allen.html> 08/21/2021.

- (3) Felicia R. Lee, “Bench of Memory at Slavery’s Gateway,” *The New York Times*, July 28, 2008.
- (4) Edgar Allan Poe, “Golden Bug,” 1843. *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe* (New York: Vintage Books, 1975), 46.
- (5) メルヴィン・ブラッグ (三川基好訳), 『英語の冒険』(アーティストハウス, 2004年), 295。
- (6) Gabriel Debien, “Marronage in the French Caribbean.” Richard Price ed., *Maroon Societies: Rebel Slave Communities in the Americas* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1996), 125–126.
- (7) Poe, 43.
- (8) 浅見義雄 「(三)「黄金虫」(エドガー・ポー原作ボードレール訳『異常な物語』研究)」『跡見学園短期大学紀要』5号(1986年), 34。
- (9) Poe, 64.
- (10) *Ibid.*, 63–64.
- (11) “Gullah,” *Britannica.com*. <https://www.britannica.com/topic/Gullah-language> 08/20/2021.